

男子大学生の無気力の研究

下山 晴彦

A STUDY ON THE ENERVATION OF MALE UNIVERSITY STUDENTS

Haruhiko SHIMOYAMA

It is often said that university students in Japan are comparatively passive and enervated. However both the peculiarity of Japanese adolescent process and the diversity of enervation must be taken into consideration. The primary purpose of this research was to investigate the meaning of the variety of enervation in relation to such adolescent aspects as psycho-social moratorium, mentality of student apathy and identity development. Passivity Area Scale, Moratorium Scale, Apathy Mentality Scale, Identity scale were administered to 522 male freshmen. The data were analyzed using multiple regression analysis. It was shown that the passivity in the area of campus was more serious than in the area of class and study. From the analysis using covariance structure analysis it was found that the structure of passivity in the area of campus was different from that in the area of class and study in so far as it was related to anhedonia seriously considered an apathetic mentality and a basic identity confusion.

Key words : enervation, apathy mentality, Japanese adolescent process, moratorium, identity.

I. 問題と目的

日本の大学生については様々な批判がみられる。例えば、アメリカの大学生に比べて学習意欲にかけるといったものから、大学がレジャーランドになっている、授業中に私語が多過ぎるといった具体的指摘まで多様であり、誉めたものはほとんど見られない。「大学生—ダメ論を越えて—」(新堀 1985) という本まで出されているほどである。

また、「キャンパスの症候群」(笠原・山田, 1980) といった書物が出版され、留年、スチューデント・アパシー等の日本の大学生特有の問題行動や病理が指摘されている。そのような議論の背景には、成熟拒否や幼児化という表現で示される発達の未熟性が日本の大学生に

は見られるといった批判的論調が強い。

しかし、日本の大学生は、かなり特殊な状況に置かれているのも事実である。松原 (1980) が「管理された予期的社会化」と称した進学システムは近年ますます低年齢化、組織化が進んでおり、大学生はそのような特殊な進学システムを経て大学に入ってくる。その結果、下山 (1992) が指摘したように日本の大学生の青年期後期の状況は、Blos (1962) や Erikson (1959) が示した古典的な青年期後期の状態とは質的に異なる独特なモラトリウム状態にある。その点で、村瀬 (1980) が論じているように日本の大学生は大学時代にサークル等で一時的に退行し、思春期のやり直しを行うことに積極的な発達の意味があるともいえる。実際に日本の大学生の場合、授業では無気力であるが、課外活動では積極的であるといった現象はしばしばみられ、無気力といってもそれが生じている領域を分化してとらえる必要がある。このような日本の青年期発達の特殊性や

¹ 東京大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education The University of Tokyo)

大学の活動領域の多様性を考えるならば、一概に日本の大学生を無気力や未熟と批判するのは適切ではない。

大学生の無気力を扱った最近の研究としては、一般学生の無気力をアパシー傾向として検討した鉄島(1993)がある。それまで人格障害レベルの学生・アパシー学生の研究がほとんどであったのに対して、鉄島は一般学生のアパシー傾向を実証的に研究しており、この点で特に意義がある。しかし、日本の大学生の無気力には、人格障害のアパシーとは異なり、上述したような一時的退行による思春期のやり直しという積極的な発達の意味があるため、一般学生の無気力を人格障害のアパシーとの連続線上で論じることが、その発達の意味を見失うおそれがある。この点に関して土川(1990)は一般学生のアパシー傾向と人格障害のアパシーを区別する分類を示し、下山(採沢)は一般学生の無気力とは異なる人格障害としての学生・アパシーの障害特性を示しており、まずは無気力の質的差異を明らかにしたうえで、その意味を検討することが必要といえる。

そこで、本研究では、まず一般学生の無気力を意欲低下として、人格障害レベルのアパシーとは区別する。そのうえで、意欲低下が生ずる領域を分化してとらえ、各領域ごとの意欲低下と人格障害レベルのアパシーの心理性格特徴およびアイデンティティの発達の程度との関連性を検討する。特に、これまでに明らかとなっている人格障害としてのアパシーの心理性格特徴との関連性を基に一般学生の意欲低下の特質についての探索的な検討を試みる。

したがって、本研究の目的は、一般大学生の意欲低下を、領域的側面、心理障害の側面、発達の側面を交えた多元的な構造として検討し、日本の大学生の無気力の意味について探索的研究を行うことである。

研究 1

1. 目的

研究1の目的は、学生・アパシーの心理性格の特徴の測定及び大学生の生活領域ごとの意欲低下の測定のための尺度の作成である。

2. 項目の選択

(a)アパシー心理性格尺度

アパシーの心理障害を測定する尺度としては、上地(1979)の「意欲減退度診断検査」、田中他(1990)の「アパシー尺度」がある。しかし、いずれも項目数が多く、しかも十分な項目分析がなされていない点で問題がある。また、Coffield & Buckalew (1986)の一連の研究

は、アパシーを実存不安としてとらえており、わが国の大学生のアパシーの心理の測定にはそぐわない。

そこで、本研究では、わが国の代表的なアパシー研究者である笠原(1984, 1988)、山田(1987)、土川(1990)の研究をもとに、アパシーの心理としてアンヘドニア(快体験の欠如)、自己不確実、時間感覚の混乱、またアパシーの性格として強迫性格、適応志向を中心に、アパシー状態に関する24項目から成る尺度を作成した。

(b)意欲低下領域尺度

現代の大学生は、大学には出てくるが、授業を含めて大学の活動に積極的に関わってくる意欲が感じられないことがしばしば指摘される。しかし、他方では大学がレジャーランド化し、大学生は積極的に大学内外の学生生活を謳歌しているとの指摘もある。このような指摘を考えるならば、現代の大学生は大学生活の様々な領域を部分的に使い分けながら、ある部分では消極的に、ある部分では積極的に学生生活を組み立てているとの推測が可能である。したがって、冒頭でも述べたように大学生の無気力という現象をみていくためには学生生活を分化してとらえ、その下位領域ごとの意欲低下の状態をみていく必要がある。

学生生活を領域別に分けてみていく必要性という点については、学生・アパシーの行動障害の研究において以前から指摘されていることである。というのは、アパシーの分類基準に関してはさまざまな議論がある中で、アパシーを特徴づける障害として必ず指摘されるのが、部分(選択的)退却と呼ばれる、学生生活の一部分についてのみの選択的な回避行動であるからである。つまりアパシーの学生は、抑鬱等でみられるような生活全般からの引き籠もりではなく、困難が予想される場面のみを選択的に避けるといった部分分裂的な行動障害を特徴とする。したがって、生活の領域を部分に分け、選択的に異なる行動を示すというのは現代の学生の特色とも考えられる。

そこで、本研究では、学生生活の領域ごとに学生の意欲低下を測定する尺度を作成することにした。この点について鉄島(1993)は一般学生のアパシー傾向に関する37項目の因子分析の結果、「授業からの退却」「学業からの退却」「学生生活からの退却」の3因子を得ている。大学生の生活領域の分類として上記3場面は現実には即した結果であるので、本研究でも鉄島の因子を参考とすることにした。ただし、上記アパシー傾向尺度は、内容的に重複する項目もみられ、項目の文章も比較的長文で複雑なものが多いので、鉄島の研究を基にして、大学生の意欲低下に関する18項目からなる尺

度を作成した。

尺度名については、冒頭で述べたように本研究の目的が一般の学生の意欲低下状態の評価であり、スチューデント・アパシーとの連続性を前提としていないので、アパシーという語を直接用いず、意欲低下領域尺度とした。

3. 被験者と実施手続

上記アパシー心理性格尺度、意欲低下領域尺度に、下山 (1992) のモラトリウム尺度およびアイデンティティ確立尺度 (アイデンティティ尺度の下位尺度) を加えた質問紙を国立 TK 大学 1 年生に施行した。なお、いずれの尺度も 4 件法によって回答を求める形式となっていた。実施時期は 1993 年 7 月で、保健体育の授業時間 (3 クラス) を利用して集団的に施行し、所要時間は 30～40 分であった。

被験者としては、回答者のうち男性 479 名のみを採用することにした。その理由は、スチューデント・アパシーが男子大学生特有の障害とされており (例えば笠原, 1984), しかも下山 (1986) などの先行研究によって青年期後期のアイデンティティの発達では性差があることが明らかになっているので、対象者を男性のみに絞る必要があると考えたからである。また、1 年生を対象としたのは、Walters (1961) を始めとしてわが国の多くの臨床研究者もスチューデント・アパシーの発現率が最も高い時期を大学 2 年としているので、2 年生以降に質問紙を施行してもアパシー傾向のある学生は既に授業に出席しなくなっている可能性が高いと考えたからである。

4. 項目分析と下位尺度の決定

(a) アパシー心理性格尺度

24 項目に対して因子分析を行い、2～6 因子を抽出し、それぞれの因子数についてプロマックス回転を施した。固有値の大きさ (固有値の変化: [第 2] 1.92, [第 3] 1.49, [第 4] 1.47, [第 5] 1.14, [第 6] 1.05) 及び因子の解釈し易さを考慮して因子数を 4 と定め、それをもとに仮説的因子パターンとして 1 または 0 を選び、斜交プロクラステス法による解を求めた結果、以下に示す因子が得られた。

第 1 因子は、生活リズムの乱れや時間感覚の希薄化がみられ、生活の張りがなくなっている心理状態を示す内容である。第 2 因子は、確固とした自分がないために自己の意志決定の障害が生じている自己不確実な心理状態を示す内容である。第 3 因子は、生活及び対人関係上における活気 (生命感・活動性) 欠如がみられ、生活全般が味気なくなっている心理状態を示す内容であ

る。第 4 因子は、自分に対する批判に敏感で、その場において常に適応的であろうと志向する完全主義的性格を示す内容となっている。

下位尺度に関しては、因子のまとまりのよさ等を考慮して各因子より 5 項目ずつ選び、TABLE 1 に示した下位尺度項目を決定した。なお、No.13 項目「自分のしていることに自信がない」は、因子寄与率が第 3 因子より第 2 因子で .01 低いことが、意味的には第 2 因子の「自己不確実による自己の意志決定の障害」を最も直截に表わしており、第 3 因子「活気 (生命感・活動性) 欠如」の状態とは異なる内容である。第 3 因子でも高い因子負荷量がみられたのは、自己の意志決定に自信がもてない自己不確実状態が、行動としては結果的に活気のない状態と類似したものとなったことによると推測される。本研究は人格障害レベルのアパシーの心理性格特徴を基にした探索的研究であるので、No.13 項目が山田 (1987) がアパシーの基本障害とする自己不確実を最も直截に表わす内容であり、しかもその差が .01 と微小であることから、第 2 因子の自己不確実の意味を明確にするために No.13 項目を第 2 因子尺度に加えることとした。下位尺度名は、各因子の特徴に基づき、それぞれ「張りのなさ」尺度、「自分のなさ」尺度、「味気なさ」尺度、「適応強迫」尺度とした。

信頼性：下位尺度の項目得点の和 (当該項目を省く) と各項目得点との相関係数 (r)、各下位尺度 (項目の単純和で定義されたもの) の α 係数を TABLE 1 に示す。「張りのなさ」「自分のなさ」「味気なさ」のアパシー心理に関する各下位尺度では、いずれの項目も相関係数が .30 以上、また α 係数も .69 以上であり、ほぼ満足できる値といえる。なお、上記の No.13 項目については、相関係数が .46 と高い値を示しており、「自分のなさ」尺度の他の項目と強い関連性をもつことが確かめられ、「自分のなさ」尺度としたことに問題がなかったことが示された。

アパシー性格に関する「適応強迫」尺度については、No.4 の項目 ($r = .14$) 以外の項目で相関係数はいずれも .20 以上みられたが、 α 係数は .51 と十分満足できる値とはいえなかった。この結果は、信頼性については検討の余地があることを示唆しているともいえる。しかし、「適応強迫」尺度の内容は、アパシーの障害の中心要因として笠原 (1984) が明らかにした病前性格と一致しており、それが一般の大学生の無気力においてどのような意味をもつかについての検討は、本研究が探索的研究であるという点からも非常に重要である。そこで、本研究では、「適応強迫」尺度については今後の

TABLE 1 アパシー心理性格尺度の下位尺度 (*は、逆転項目)

因子	NO	項 目	因子負荷量(プロクラステス法)					r	α 係数
			F1	F2	F3	F4	h ²		
張りのなさ	6.	よく眠れて朝は爽快な気分で起きられる。*	-.62	.21	.05	.33	.44	.37	.70
	11.	毎日を何となく無駄に過ごしている。	.51	.35	-.19	-.12	.65	.54	
	14.	いつも頭がぼんやりしている。	.58	.08	-.12	.07	.44	.50	
	15.	朝起きて夜眠る生活のリズムが乱れている。	.66	-.09	.15	.16	.40	.35	
	19.	時間がただ過ぎていくという感じがある。	.48	.35	-.16	-.11	.58	.54	
自分のなさ	1.	一度決めたことでも人から言われると決心が変わりやすい。	-.17	.57	-.05	.29	.42	.35	.70
	5.	自分が本当に何をやりたいのか分からない。	-.01	.75	-.02	-.04	.56	.60	
	7.	自分の将来といっても現実感がない。	-.07	.72	.04	.00	.48	.50	
	13.	自分のしていることに自信がない。	.22	.31	-.32	.30	.51	.46	
	21.	何となく大学まで来てしまったという感じがある。	.15	.59	.01	-.14	.43	.43	
味気なさ	2.	心から楽しいと感じる時がある。*	-.25	.26	.70	.16	.59	.50	.69
	3.	自分の人生を生きているという実感がない。	.30	.15	-.51	.16	.54	.57	
	10.	何事も生き生き感じられない。	.38	.17	-.44	-.08	.56	.53	
	17.	人に対して自分の意見や考え方をはっきりと主張する。*	.25	-.18	.60	-.19	.45	.33	
	20.	自分の悩みを何でも話せる友人がいる。*	.15	.15	.70	-.14	.42	.31	
適応強迫	4.	きちんとしていないと気が済まない。	.03	-.39	-.05	.41	.26	.14	.51
	8.	人からの批判がとても気になる。	-.02	.20	-.08	.70	.58	.41	
	9.	自分が何をしたいかよりも何が自分に期待されているかを優先する。	.08	.19	.14	.40	.23	.22	
	12.	勝ち負けにこだわる。	.26	.11	.31	.40	.31	.23	
	16.	自分の弱みを人に知られたくない。	.18	-.18	-.24	.66	.49	.33	

改良が必要であるが、参考尺度として採用することにした。

各尺度間の相関係数は、TABLE 2 に示したように「張りのなさ」「自分のなさ」「味気なさ」の3尺度間では比較的高い相関があるのに対して、上記3尺度と「適応強迫」尺度との間では比較的低い相関がみられた。この点に関しては、上記3尺度がスチューデント・アパシーの心理障害に関する尺度であるのに対して「適応強迫」尺度は性格に関する尺度であるので、そこに差が生じるのはうなづける結果といえる。

TABLE 2 アパシー心理性格の下位尺度間の相関係数

	張りのなさ	自分のなさ	味気なさ	適応強迫
張りのなさ				
自分のなさ	.50			
味気なさ	.47	.46		
適応強迫	.20	.19	.06	

妥当性：「張りのなさ」尺度が示す内容は、土川(1985)

や湊(1990)の指摘にもあるようにスチューデント・アパシーの障害で必ずみられる昼夜逆転などの生活のリズムの乱れに相当する。「自分のなさ」尺度の示す内容は、山田(1987)がスチューデント・アパシーの基本障害とする自己不確実性に相当する。「味気なさ」尺度の示す内容は、笠原(1984)がスチューデント・アパシーの感情的な障害として明確化したアンヘドニアに相当する。このアンヘドニアは、精神分裂病の陰性症状でもあり、アパシーの問題の病理性を示すとともに、スチューデント・アパシーの心理障害と他の心理障害(例えば、気分障害や不安障害)との鑑別をする際の指標ともなる重要な特徴である。また、「適応強迫」尺度の示す内容は、笠原(1984)がスチューデント・アパシーの病前性格として重視する批判過敏性と強迫傾向に相当する。さらに、下山(採択済)は、スチューデント・アパシーの障害に関する上記先行研究をまとめた上で、アパシーには「自分のなさ」「味気なさ」「張りのなさ」から成る「悩めない」心理障害と「自立適応強迫」の性格傾向を含む人格構造が見られることを事例研究によって示しており、本研究の結果はこの人格構造とも一致している。したがって、本研究の尺度は内容的妥

当性を備えているといえる。

アパシー心理性格とモラトリアムの各下位尺度間の相関係数をみたところ TABLE 3 に示す結果がえられたので、相関係数が有意であった尺度を調べ、関連性の検討を行った。「自分のなさ」尺度は、全てのモラトリアムの下位尺度との間で正の関連性がみられた。モラトリウムとはアイデンティティの未確立、つまりまだ自分ができていない状態であるので、「自分のなさ」がモラトリアムの全ての状態と関連するのは当然である。したがって上記関連性はうなづける結果である。「張りのなさ」「味気のなさ」尺度では、模索尺度以外のモラトリアムの下位尺度との間で正の関連性がみられた。「模索」は職業決定に向けて積極的に活動している状態であるので、「張りのなさ」や「味気のなさ」との関連は考えられない。それに対して「延期」「混乱」「回避」は、ともに進路について自己決定をしない、或いはできない消極的な状態であるので、アパシー心理との関連性が推測される。したがって上記関連性はうなづける結果である。

TABLE 3 モラトリウムとアパシー心理(性格)の下位尺度間の相関係数

モラトリウム アパシー	模 索	延 期	混 乱※	回 避
張りのなさ	-.01	.18***	.25***	.34***
自分のなさ	.12**	.46***	.45***	.59***
味気のなさ	-.06	.18***	.27***	.33***
(適応強迫)	(.07)	(.07)	(.24***)	(.17***)

※下山(1992)では、この尺度名は「拡散」となっていたが、項目の内容から本研究では「混乱」と改めた。

P<.05... P<.01... P<.001... (以下同)

なお、参考尺度の「適応強迫」尺度に関しては、模索、延期尺度とは関連性はみられず、混乱、回避尺度との間で正の関連性がみられた。「模索」「延期」は職業未決定状況を受容し、それに意識的に対応できている心理的に安定した状態である。それに対して、「混乱」「回避」は職業未決定状況を受容できずに心理的に不安定となっている状態である。この点に関しては、笠原(1984)のアパシーの病前性格論にも示されているように、「混乱」や「回避」では適応強迫性格のため未決定事態を受け入れられずに心理的ストレス状態となっていることが推測されるので、上記関連性はうなづける結果である。

以上の結果から、(参考尺度であるアパシー性格尺度を含め

た)アパシー心理性格尺度の妥当性(基準関連妥当性)が示されたといえる。

(b)意欲低下領域尺度

18項目に対して因子分析を行い、2～5因子を抽出し、それぞれの因子数についてプロマックス回転を施した。

固有値の大きさ(固有値の変化:[第2] 2.05, [第3] 1.55, [第4] 0.98)及び因子の解釈し易さを考慮して因子数を3と定め、仮説的因子パターンとして1または0を選び、斜交プロクラステス法による解を求めたところ、以下に示す因子が得られた。第1因子は勉学への興味を失い、学業領域に関する意欲低下を示す内容であった。第2因子は授業領域に関しての意欲低下を示す内容であった。第3因子は大学キャンパスへの所属感がなく、大学領域に対しての意欲低下がみられる内容であった。そこで、因子のまとまりのよさ、他の因子との対比等を考慮して各因子より TABLE 4 に示す5項目を選び、それぞれ学業意欲低下尺度、授業意欲低下尺度、大学意欲低下尺度と命名し、下位尺度を作成した。信頼性:3尺度それぞれに関して、因子分析の際の因子負荷量、尺度の項目得点の和(当該項目を省く)と当該項目との間の相関係数(r)、 α 係数を TABLE 4 に示した。相関係数はNo.10項目が $r=.32$ でそれ以外は全て.40以上、また α 係数も全て.73以上といずれも満足できる値であり、本尺度の信頼性が保証されたといえる。

妥当性:得られた下位尺度の内容は、鉄島(1993)のアパシー傾向尺度の下位尺度の内容と一致しており、尺度項目も同一或いは類似のもので構成されている。その点で、得られた尺度はアパシー傾向尺度の簡易版といえるものである。鉄島(1993)においてアパシー傾向尺度の妥当性が確かめられているので、本研究の尺度もそれに準じた妥当性を持つと推測される。なお、第3因子に相当する尺度については、鉄島では「学生生活」という名称が使われていたが、本研究では生活領域としては「大学」そのものが対象となっているので、「大学」という名称とした。

研究 2

1. 目 的

領域ごとの意欲低下と、青年期後期の発達状況(モラトリウム、アイデンティティ)及びスチューデント・アパシーの心理性格特徴との関連性を検討し、各領域における意欲低下の意味とその要因の考察を行う。

TABLE 4 意欲低下領域尺度の下位尺度 (* は、逆転項目)

因子 (尺度)	NO	項 目	因子負荷量(プロクラステスト法)				r	α 係数
			F1	F2	F3	h ²		
学業 意欲 低下	2.	教師に言われなくても自分から進んで勉強する。*	.68	-.01	.05	.45	.49	.73
	8.	勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう。	-.72	-.05	.05	.51	.52	
	11.	勉強で疑問に思ったことはすぐ調べる。*	.79	.13	.09	.52	.55	
	14.	必要な単位以外でも、関心のある授業はとるようにしている。*	.51	.16	.05	.34	.41	
	17.	大学で勉強をすることで自分の関心を深めている。*	.70	.08	-.19	.54	.53	
授業 意欲 低下	1.	授業に出る気がしない。	-.25	.59	.10	.59	.51	.73
	4.	朝寝坊などで授業に遅れることが多い。	.14	.77	-.01	.51	.46	
	7.	何となく授業をさぼることがある。	.03	.79	-.06	.58	.53	
	10.	大学からの連絡事項を見落としてしまうことが多い。	-.10	.40	.03	.21	.32	
	13.	授業の課題の提出が遅れたり、出さなかったりすることがある。	.19	.68	.13	.43	.43	
大学 意欲 低下	6.	学生生活で打ち込むものがない。	-.04	.03	.70	.52	.55	.77
	9.	大学ではいろいろな人と交流がある。*	-.13	.08	-.79	.56	.55	
	12.	大学にいるより、自分ひとりでいるほうがいい。	.07	-.10	.72	.47	.47	
	15.	大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である。*	.20	-.08	-.63	.54	.53	
	18.	大学のなかで自分の居場所がないと感じる。	.07	.04	.76	.57	.59	

2. 方 法

研究1で作成されたアパシー心理性格尺度、意欲低下領域尺度に下山 (1992) のモラトリウム尺度、アイデンティティ尺度を加えた質問紙を国立 TK 大学1年生に施行した。実施時期は1993年10月で、保健体育の授業時間(研究1とは異なる3クラス)を利用して集団的に施行し、所要時間は30~40分であった。

被験者としては、回答者のうち男性522名のみを採用することにした。被験者を1年生の男性のみに絞った理由は、研究1で述べたとおりである。

3. 結果と考察

3-1) モラトリウムとの関連で見たい領域別意欲低下

青年期後期にあたる大学生の最も重要な発達課題は、最終的な進路決定としての職業決定である。この点で、大学における学習そのものが職業決定に向けての準備と見ることもできる。したがって、学生生活への意欲は、進路決定の状態或は職業決定に対する態度と密接な関連性があることが予想される。そこで、職業決定に対する態度であるモラトリウムの状態と領域別の意欲低下との関連性の検討を行った。

モラトリウムの各下位尺度と領域別意欲低下の各下位尺度の間の相関係数をみたところ TABLE 5 に示す結果が得られたので、相関係数が有意であった関係を取り上げて両尺度間の関連性を検討した。「授業意欲低下」は、「延期」と「回避」との間で正の関連性がみられた。したがって職業決定を避ける延期や回避といっ

た傾向が強い場合には授業に関する意欲低下の傾向がみられることが示された。「学業意欲低下」では、「模索」との間で負の関連性、「延期」「回避」との間で正の関連性がみられた。したがって職業決定を避けるのに加えて職業決定に向けての模索に消極的な傾向が強い場合には、学業に関する意欲低下の傾向がみられることが示された。さらに「大学意欲低下」では、「延期」「混乱」「回避」との間で正の関連性がみられた。したがって職業決定を避けるだけでなく、職業決定に直面して心理的に混乱している傾向が強い場合には、大学生活に関する意欲低下の傾向がみられることが示された。

TABLE 5 モラトリウムと領域別意欲低下の下位尺度間の相関係数

領域		授 業	学 業	大 学
モラトリウム				
模 索		.02	-.18***	-.10
延 期		.21***	.31***	.14***
混 乱		.09	.07	.18***
回 避		.24***	.30***	.23***

以上みたように授業、学業、大学といずれの領域でも職業決定の回避傾向と意欲低下との間で正の関連性がみられ、職業決定の回避が大学生の意欲低下全般と

密接な関連を有していることが示唆された。またモラトリアムのそれぞれの傾向との関連性という点では、授業、学業、大学の各領域でその内容が異なっていることも確かめられた。例えば授業の意欲低下では延期、回避との関連性が見られただけであったのに対して、学業の意欲低下ではそれに加えて模索との負の関連性が見られた。したがって学業の意欲低下が生じている場合には、職業決定について考える意欲そのものが乏しいことが推測される。さらに、大学に対する意欲低下では、延期、回避に加えて混乱との間で正の関連性が見られた。したがって大学自体に対する意欲低下が生じてきている場合には、職業決定に関する消極性は心理的混乱といった深刻な事態となっており、それが大学に対する意欲低下に関与していることが推測される。このように授業→学業→大学の領域になるに従って、意欲低下と関連するモラトリアムのあり方がより複雑で混乱したものとなる傾向がみられた。

3-2) アパシーの心理性格との関連で見た領域別意欲低下

意欲低下とモラトリウム状態との関連性の内容は各領域で異なっており、特に大学領域では心理的混乱との関連が推測されるという上記結果から、領域によっては単なる意欲低下ではなく、心理障害との関連性も検討する必要があることが示唆されたといえる。そこで、人格障害レベルの慢性的な意欲減退を呈するスチューデント・アパシーの心理性格の特徴と領域別の意欲低下との関連性を検討し、アパシーの心理性格的要因が各領域の意欲低下に与える影響について考察した。

参考尺度であるアパシー性格尺度を除いたアパシー心理の下位尺度を説明変数、意欲低下領域の各下位尺度をそれぞれ被説明変数とした重回帰分析、及びアパシー性格尺度を加えたアパシー心理性格の下位尺度を説明変数、意欲低下領域の各下位尺度をそれぞれ被説明変数とした重回帰分析を行ったところ(TABLE 6)、いずれの重相関係数も $P < .001$ 水準で有意であった。そこで、意欲低下領域の各下位尺度ごとに標準偏回帰係数(以下 β) が 5 % 水準以下で有意であった関連性の検討を行った。

授業意欲低下尺度では、「味気のなさ」との間に負の関連性、「張りのなさ」「自分のなさ」との間に正の関連性がみられた。また、参考尺度を含めた場合は、以上の関連性に加えて「適応強迫」との間に負の関連性がみられた。したがって、確固とした自分を確立しておらず、生活にもメリハリがないが、性格的にはルー

TABLE 6 アパシー心理(性格)尺度と領域別の意欲低下尺度との重回帰分析

領域 アパシー	授 業	学 業	大 学
張りのなさ	.35*** (.38***)	.12* (.12*)	.15** (.16**)
自分のなさ	.12* (.14*)	.37*** (.34***)	.06 (.05)
味気のなさ (適応強迫)	-.17** (-.20***) (-.12*)	-.03 (-.04) (-.14**)	.45*** (.49***) (.05)
重相関係数	.37*** (.14***)	.43*** (.20***)	.57*** (.33***)

() 内は、アパシー性格尺度を加えた重回帰分析

ズで生活を楽しむといった傾向が強い場合には、授業に関する意欲低下の傾向がみられることが示された。このように、病的アパシーの中核的心理障害とされる味気のなさ(アンヘドニア)との間に負の関連性がみられたことから、授業意欲の低下は、むしろ健康的側面を含んでいることが示唆された。

学業意欲低下尺度では、「張りのなさ」「自分のなさ」との間に正の関連性がみられた。また、参考尺度を含めた場合には、以上の関連性に加えて「適応強迫」との間に負の関連性がみられた。したがって、学業に関する意欲の低下は、確固とした自分がなく、また生活にも張りがなく、しかも性格的にルーズな場合に生じている傾向がみられることが示された。このように学業意欲低下では、自分のなさや生活の乱れなどの問題はあにしろ、アパシーの中核的心理障害である「味気のなさ」が関連しておらず、その点で病的傾向は見られないことが示唆された。

それに対して大学意欲低下尺度では、「張りのなさ」「味気のなさ」との間に正の関連性がみられた。したがって大学生活に関しての意欲低下は、生活に張りがなくなるだけでなく、生活そのものが味気なく、生き生きとした感覚が薄れている場合に生じている傾向がみられることが示された。ここで大学意欲低下で「味気のなさ」との間に正の関連性がみられたことから、大学そのものに対する意欲低下が生じている状態では、病的アパシー心理が介在している可能性が強いことが示唆された。

以上みたように、授業、学業、大学いずれの領域でも「張りのなさ」尺度との関連がみられており、生活に張りがなくなり、生活のリズムが乱れることが大学生の意欲低下全般と関連していることが示された。また、上記結果からアパシーの心理性格との関連性は各領域でそれぞれ異なっていることが明らかとなったが、

その中でも大学領域は他の領域とは異なり、病的アパシーの特徴とされるアンヘドニアに相当する「味気なさ」との関連性がみられており、大学そのものに関する意欲低下は他の状態とは異なる深刻な事態である可能性が示唆された。

3-3) アイデンティティとの関連で見た領域別意欲低下

以上の結果から、大学に対しての意欲低下は他の領域とは異なり深刻な心理的問題の影響を受けている可能性が示唆された。心理的問題は発達の未熟性と密接な関係があると推測されるので、アイデンティティの発達と領域別の意欲低下の関連性を調査し、発達の観点から上記結果の再検討を行った。

アイデンティティ尺度の下位尺度を説明変数、意欲低下領域の各下位尺度のそれぞれを被説明変数として重回帰分析を行った (TABLE 7)。重相関係数及び β は、学業意欲低下、大学意欲低下の両尺度においてのみ有意であり、授業意欲低下尺度では有意な関連性はみられなかった。したがって、授業に関する意欲の低下については、アイデンティティの確立・未確立と関連しているといった深刻な状態ではないことが示された。つまり、授業に対して意欲の低下が見られたとしても、それは少なくともアイデンティティの未確立によって説明されるような問題をもつ状態ではないことが明らかとなった。

TABLE 7 アイデンティティ尺度と領域別の意欲低下尺度と重回帰分析

領域 アイデンティティ	授 業	学 業	大 学
アイデンティティの基礎	.01	.04	-.15***
アイデンティティの確立	-.02	-.19***	-.15***
重相関係数	.00	.11***	.19***

次に、学業、大学の領域において β が 5%水準以下で有意であった尺度を調べ関連性の検討を行った。学業意欲低下尺度では、「アイデンティティの確立」との間に負の関連性がみられた。したがって学業に関する意欲低下は、青年期の発達課題である社会的アイデンティティの未確立に関連した事態であることが示された。なお、「アイデンティティの基礎」との間では関連性がみられず、学業に関する意欲低下は青年期以前のアイデンティティの問題と関連していないことも示された。この点で、学業への意欲が低下したとしても、

それは青年期に成し遂げておくべき社会的アイデンティティの確立の問題に直面している状態であり、特に深刻な発達障害の問題をもつ状態でない可能性が示されたといえる。

それに対して大学意欲低下尺度では、「アイデンティティの確立」に加えて「アイデンティティの基礎」との間において負の関連性がみられた。したがって大学に関する意欲の低下は、単に青年期の発達課題に関する問題だけでなく、青年期以前の乳幼児期の発達課題であるアイデンティティの基礎の未形成とも関連する事態であることが示された。この点で、授業や学業だけでなく大学生活そのものに関する意欲が低下してきた場合には、青年期の一時的なモラトリウム状態というよりは、アイデンティティの基礎部分の不安定さを伴う深刻な発達の問題と関連した状態である可能性が示されたといえる。

以上の結果から、アイデンティティの確立の問題と意欲低下との間の関連性は授業、学業、大学の各領域で異なっており、特に大学に関する意欲低下が生じてきた場合には深刻な発達の問題との関連性が予測されることが明らかとなった。

研 究 3

1. 目 的

研究2の結果をもとに大学生の無気力の形成に関する因果モデルを推定し、モデルの妥当性の検証を行う。

2. 因果モデルの構築

研究2の結果から、心理障害の点でもまた心理発達の面でも、大学に対する意欲低下は、授業や学業に関する意欲低下とは意味が異なっていることが推定される。つまり、発達早期に関わる「アイデンティティの基礎」の未発達及びアパシー心理障害のなかでも特に病的に重いとされる「味気なさ」が要因として関連している点で、「大学に関する意欲低下」は「授業や学業に関する意欲低下」とは異なる形成プロセスをもつとする仮説モデルの想定が可能である。そこで、研究2の結果をもとに、研究2で用いた下位尺度の一部を構成概念として構成概念間の因果モデル (これをモデル1とする) を構築した。それをパス・ダイアグラムを用いて表現したものが FIGURE 1 である (ただし、FIGURE 1 には後述する分析結果も併記してある)。

モデル1では、次のような因果連鎖を想定している。まず「張りのなさ」要因つまり生活のリズムの乱れによって授業のスケジュールについていけないことが生じ、「授業に関する意欲低下」の行動が見られるように

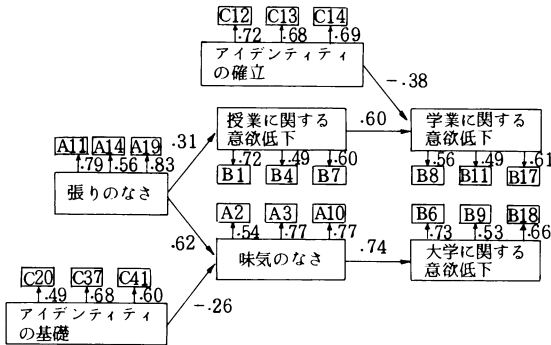


FIGURE 1 モデル1の因果モデル

※「アイデンティティの基礎」「アイデンティティの確立」の観測変数の番号は、下山(1992)に示されている「アイデンティティ」尺度の項目番号に対応する。

なる。ここで、単に授業に出ないだけであれば具体的行動の問題レベルであるが、これに青年期の発達課題であるアイデンティティが未確立で自己の進路等が定まっていなかった「アイデンティティの確立」要因が関わってくると単なる行動上の問題だけではなく、「学業に関する意欲低下」という、一般的な動機づけに関わる問題が生じてくる。ただし、この場合は青年期の発達課題が要因となっているだけであるので、病的状態というより、青年期の一時的不適応のレベルである。

ところが、上記の授業→学業の意欲低下の因果連鎖とは別に発達早期の問題に由来する自我の不安定さ、つまり「アイデンティティの基礎」要因が関わっている場合には、病的アパシーに特徴的な心理状態である「味気のなさ」が生じる。さらに、この「味気のなさ」が要因となって「大学に関する意欲の低下」といった深刻な事態が生じることになる。

「張りのなさ」要因がいずれの領域の意欲低下にも共通要因として関与(研究2の重回帰分析でも「張りのなさ」は、いずれの領域でも意欲低下との関連がみられた)しているものの、「アイデンティティの基礎」と「味気のなさ」が関わっているという点で「大学に関する意欲低下」の形成は他の領域の意欲低下とは質の異なるプロセスとなる。

なお、上記モデル1の比較対照モデルとして、授業、学業、大学の各領域の意欲低下は同一次元上にあり、それぞれの意欲低下は諸要因が加わるにしたがって程度が重くなるだけの連続的プロセスであるとする因果

連鎖モデルをたてることが可能である。そこで、モデル2として、モデル1と同一の構成概念を用い、「学業に関する意欲低下」が「大学に関する意欲低下」の要因となっていると仮定するモデルを構築した。モデル2の構成概念間の因果モデルをパス・ダイアグラムを用いて表現したのがFIGURE 2である(FIGURE 2には後述する分析結果も併記してある)。

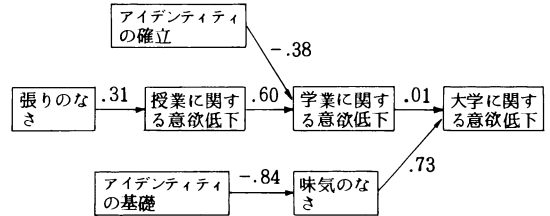


FIGURE 2 モデル2の因果モデル

3. 方法

データ: 研究2のデータ(TK大学1年生,男性,522名)を用いる。

構成概念の項目: アパシー心理性格尺度(A), 意欲低下領域尺度(B)についてはTABLE 1, 4を, またアイデンティティ尺度(C)については下山(1992)を参考にして, それぞれの尺度ごとに尺度と項目の相関係数(r)が最も高いものから3項目を選択し, その3項目によって各概念が構成されるとした。FIGURE 1に各尺度を表わす上記A, B, Cを付したうえで, 選択された項目の項目番号を示した(選択された項目は両モデルで同一であるので, FIGURE 2では項目番号の記載を省略した)。

分析: 豊田他(1991), 鈴木・柳井(1993)は, 共分散構造分析を用いて高校生の進路決定に関する因果モデルの検討を行っている。それらを参考にし, 共分散構造分析(豊田, 1992)を用いてモデル1, モデル2で示した因果モデルの妥当性の比較検討を行う。なお, 共分散構造分析では, 統計パッケージSASの中のプロシジャー「CALIS」を用いた。

4. 結果と考察

FIGURE 1, FIGURE 2のパス・ダイアグラムの中に共分散構造分析によって推定された因果関係を示した。

モデルの部分的評価を検討するため, 構成概念から各項目(観測変数)への影響指標の値を調べたところ, モデル1, モデル2ともに全ての項目で.40以上であり, いずれも統計的に有意となり, 構成概念と観測変数との関係は適切に対応していることが確認された。

なお、影響指標の値が両モデル間で同じような値となっていることから、両モデルで適合性に相違があった場合には、構成概念間の因果関係によるものであることが示唆された（両モデル間で影響指標が近似の値であったのでFIGURE 2の影響指標の記載は省略した）。

GFI（適合度指標）、AGFI（修正適合度指標）、RMR（残差平方平均平方根）及びAIC（Akaike's Information Criterion）の値をTABLE 8に示す。モデル1でGFI=.925, AGFI=.903, モデル2でGFI=.915, AGFI=.891といずれも十分高い値を示しており、構成されたモデルは標本共分散行列をよく説明していることが示された。

TABLE 8 モデル比較の指標

指標 モデル	観測変数 の個数	パラメータ の数	GFI	AGFI	RMR	AIC
モデル1	21	51	.925	.903	.056	65
モデル2	21	51	.915	.891	.058	103

そこで、両モデルの適合性の比較を行うためにAICの値をみたところ、モデル1では65、モデル2では103とモデル1の値の方が小さいとの結果が見られた。したがって、モデル1の方がモデル2に比べてモデルとしての妥当性が高いことが示された。さらに、モデル1では全てのパスの係数が統計的に有意であったのに対して、モデル2では「学業に関する意欲低下」から「大学に関する意欲低下」のパスの係数が.01と統計的に有意でない（ $t=.14$, N.S.）、極端に低い値となっており、上記構成概念間の因果関係がみられないことが示された。「学業に関する意欲低下」→「大学に関する意欲低下」は、「授業、学業、大学の各領域の意欲低下は同次元上にある」とするモデル2の仮説の根拠となる因果関係であるので、この因果関係の存在の否定はモデル2の妥当性に問題があることを示す結果である。

以上の2つの結果から、授業・学業・大学の3領域の間の意欲低下を連続的な同次元とみなす因果関係仮説（モデル2）よりも、授業・学業領域と大学領域の意欲低下を非連続で質的に異なる次元上にあるとする因果関係仮説（モデル1）の方が、現象の説明として適切であることが示されたといえる。

討 論

研究2及び研究3の結果から、大学に対する意欲低下は、授業及び学業に関する意欲低下と比較して心理

的混乱や障害、発達の問題を予測させるという点で深刻な事態であることが明らかとなった。

他方、上記結果からは、授業に関する意欲低下は、発達のな問題というよりも、快追求・課題回避の性格に由来するルーズな生活態度によって生じた行動上の問題と推測される。また、学業に関する意欲低下は、青年期の発達課題が未確立なため、学業或は職業決定といった課題を一時延期している状態と考えられる。したがって、意欲低下が授業や学業にとどまっている限りは、青年期的な一時的不適応状態と考えられ、特に深刻な発達のな問題や心理障害が関連していない可能性が高い。このような授業や学業に対する意欲低下は、Erikson (1959) の示した本来の課題探索・積極的なモラトリウム（モラトリウム尺度の「模索」に相当）ではなく、下山 (1992) が概念化したわが国特有の課題延期・遊戯的モラトリウム（モラトリウム尺度の「延期」に相当）と密接な関連があると考えられる。この点でわが国の大学生における授業や学業に関する意欲低下は、村瀬 (1980) が指摘しているように大学という枠内で一時的に退行し、思春期に達成できなかった仲間関係や異性関係の形成といった青年期前期や中期の課題をサークルやクラブといった課外活動で試している事態とみることもできよう。

それに対して、大学そのものに関する意欲の低下がみられる場合には、乳児期に由来する深刻な発達の問題やスチューデント・アパシーの心理的障害との関連性の可能性が高くなる。したがって、わが国の大学生では、授業や学業に意欲を示すか示さないかではなく、大学そのものに対して意欲をもつかもたないかが心理的問題との関連性を考慮する際の重要な基準となる。このような結果は、わが国の大学生においては、授業や学業といった大学のもつ教育的機能よりも大学という環境（キャンパス）が重要な心理的意味を備えていることを示しているといえよう。

付 記

本研究は、財団法人 電気通信普及財団の平成6年度助成金（研究代表者 下山晴彦）の一部を用いて行った。なお、論文作成に関しては、株式会社アルファシステムズの原 誠一郎氏に貴重なご意見をいただいた。記して感謝します。

引用文献

Blos, P., 1962 On Adolescence ; A Psychoanalytic Interpretation. Free Press, New York. (プロ

- ス『青年期の精神医学』野沢栄司訳 誠信書房 (1971)
- Erikson, E. H., 1959 *Identity and The Life Cycle*, International University Press. (エリクソン『自我同一性』小此木啓吾訳編 誠信書房 1973)
- Coffied, K. E., & Buckalew, L. W., 1986 Student apathy : An analysis of relevant variables. *College Student Journal*, **20**, 211-214.
- 笠原嘉・山田和夫(編) 1980 キャンパスの症状群 弘文堂
- 笠原嘉 1984 アパシー・シンドローム 岩波書店
- 笠原嘉 1988 退却神経症 講談社
- 松原治郎 1980 管理会社と青年 大原健士郎他(編) 思春期・青年期の異常心理 新曜社 81-95.
- 湊博昭 1990 スチューデント・アパシー 臨床精神医学, **19**, 855-860.
- 村瀬孝雄 1980 退行しながらの自己確立 笠原嘉・山田和夫(編) 1980 キャンパスの症状群 弘文堂 209-232.
- 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, **34**, 20-30.
- 下山晴彦 1992 モラトリアムの下位分類の研究 -アイデンティティの発達との関連で- 教育心理学研究, **40**, 121-129.
- 下山晴彦(採択済) スチューデント・アパシーの構造の研究 -モデル構成現場心理学の試みとして- 心理臨床学研究.
- 新掘通也(編) 1985 大学生 -ダメ論をこえて- 至文堂
- 鈴木規夫・柳井晴夫 1993 因果関係モデルによる高校生の進路意識の分析 教育心理学研究, **41**, 324-331.
- 田中千穂子他 1990 アパシー尺度作成の試み(第一報) -TPIによる検討- 心の健康, **5**, 67-76.
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究 -関連する諸要因の検討- 教育心理学研究, **41**, 200-208.
- 豊田秀樹他 1991 高等学校の進路指導の改善に関する因果モデル構成の試み 教育心理学研究, **39**, 316-323.
- 豊田秀樹 1992 SASによる共分散構造分析 東京大学出版会
- 土川隆史 1985 スチューデント・アパシーと生活リズム 教育心理, **33**, 771-773.
- 土川隆史 1990 スチューデント・アパシーの輪郭 土川隆史編 スチューデント・アパシー 同朋舎 1-65.
- 上地安昭 1981 学生の意欲減退 石井完一郎他編 スチューデント・アパシー 至文堂 188-200.
- Walters, P. A. Jr. 1961 Student Apathy in "Emotional Problem of the Student" ed by Blaine B. Jr. & McArthur C. C. Appleton-Century-Crofts, New York. (笠原嘉, 岡本重慶訳『学生のアパシー』 石井完一郎他監訳「学生の情緒問題」 文光堂 1975 106-120.)
- 山田和夫 1987 スチューデント・アパシーの基本病理 -長期縦断的観察の60例から- 平井富雄編 現代人の心理と病理 サイエンス社 355-373.

(1994.11.18 受稿, '95.3.24 受理)